

コインシステムによる洗濯の共同化について

町田 玲子

Study on the Co-operation of the Washing Task

REIKO MACHIDA

コインシステムによる洗濯の共同化について、実施されている所の実態、および以前実施されていたが、その後廃止された所の問題を明らかにして、そのあり方を考えようとした。

その結果、管理体制、立地条件などが、継続していく上で重要であること、コインシステムは、若い層にとっては、従来の洗濯を楽しみの一つに変える可能性のあること、共働き家庭にも受け入れられやすい長所をもっていること、などが明らかになった。

I 緒 言

家事労働の内容の一つである洗濯は、「洗う」、「脱水する」、「乾かす」、「とり入れる」、「たたむ」の一連の労働をいう。昨今では、そのうち、前二者（「洗う」、「脱水する」）は、家庭用洗濯機の普及により、かなり、負担が軽減されている。

しかし、洗濯に関する生活上の問題は、依然として、残っている。第1に、洗濯に要する総時間が長く¹⁾²⁾、その間、人手、あるいは、監視が必要となり、日中、留守がちの家庭では、「何とかしたい」と思っている層が多い³⁾点があげられる。これは、先に述べた一連の洗濯労働のうち、後三者が、問題となってくる。第2に、住宅が家族人数に対して狭い場合、家庭用洗濯機の占める場所、「乾かす」為の場所ゆえに、居住性を損なわれることがある。たとえば、2DKの共同住宅では、「玄関への通路、浴室への通路部分に洗濯機を置かざるを得ず、人は、横になって、すり抜けなければならない」、あるいは、ベランダで「乾かす」と、「居室が暗くなる」、「乾きが悪い」、「居室の延長としての空間利用（緑の楽しみ、子供の遊び）ができなくなる」のような不満にみられる問題である。これら第1、第2の問題は、洗濯に関し、各家庭での個別処理が、一因にもなっている。

それに対し、洗濯を地域間の共同化で処理する方法がある。農村では、従来から行われている方法であり、都市でも、共同住宅などで近年みられる方法である。

それら、利用上の問題については、事例研究として、すでに報告した通りである⁵⁾⁶⁾。

今回は、洗濯の共同化形態の他の方法であるコインシステムによる場合の利用実態を事例研究として行なったので報告する。すなわち、利用者の状況、利用上の問題を明らかにし、コインシステムによる洗濯の共同化の今後のあり方を考えてゆくことを目的とするものである。

先に述べたように、洗濯に関する生活上の問題は、生活の変容の中でとらえ、その解決は、社会の動きの中で対応させていく必要がある。その一つの方向として、共同化形態がある。その形態の実態を探り、問題点を明らかにしてゆくことは、洗濯に関する諸問題の根本的な解決につながっていく上で、意義あるものといえよう。

II 調査方法

①コインシステムによる洗たくの共同化形態を採っている「オリンピア・ランドリー」で、調査を行なった。

調査対象者は、外国人を除く利用者全員で、計125名であり、アンケート用紙を配布し、利用者本人が記入の上、その場で回収、もしくは、郵送による回収を行なって、計108票を得た。（回収率86.4%）

調査時期は、昭和46年7月29日（金）～7月31日（日）の3日間である。

なお、コインシステムによる洗濯の共同化形態は、関西では、当時、事例がなく、東京都で、四ヶ所ある

のみであった。調査対象に選んだ当洗濯所は、中でも最も設備が整い、かつ、開設時期も古く、昭和38年以来、8年目を迎えている。

②日本住宅公団・赤羽台団地（昭和37年2月管理開始、計、3373戸）では、入居開始当初から約半年間、セルフサービスのコインシステムによる洗濯の共同化形態を採っていたが、種々の問題が生じて廃止された。その間の事情を、日本住宅公団、(株)団地サービス、および赤羽台団地で実施する際の関係者などに聞き取り調査を行なった。

調査時期は、昭和45年1月～3月にかけて数回。

III 調査結果

(1) 調査対象の概要

東京都内・原宿駅より徒歩1～2分にあるCマンション（民間）の地下1階に、当洗濯所がある。隣接して、スーパーマーケットも併設されているが、いずれも同一経営者である。

利用時間は、午前9時から、午後7時40分頃まで。

利用状況は、3月頃から初夏にかけて混み（約300人/日）、7月半ばから8月にかけては空いている。各月では、中旬が比較的空いている。1日のうちでは、夕方から、混みやすくなる。年間通じて、外部からの利用者が多い。

当洗濯所内へは、スーパーマーケットを通過して入る。入口付近に、休けい設備があり、その奥に係員のいるカウンターがある。カウンターで、洗濯すべき汚

れ物を計量し、重量に応じて、コインを買う。洗濯機（脱水も可能）は計12台。繊維の質に応じて、ドライ用・一般用を選ぶ必要がある。ほかに、乾燥機、脱水機、シミ抜き設備、ハンガー台、たたみ台がある。洗濯所の最も奥にプレスコーナーがある。本職のクリーニングの職人が数人おり、希望者の注文に応じている。（有料）

要所要所に使用要領が掲示され、係員も指導に回っている。

(2) 利用者の概要

利用者の職業、収入、家族構成は、図1に示す通りである。既婚婦人の利用者が計22名おり、そのうち16名が有職者であった。収入は、「家族と別居」はその約44%が「6万円以下」であるが、学生が、大半を占めているためと思われる。学生を除く学歴をみると、小・中卒が2.2%、高卒が32.2%、大学卒以上が、52.2%となっている。（不明、13.3%）年齢は、20代が最も多くて、68.5%（家族同居25.0%、別居43.5%）、50代以上、及び20代までは、各々、2.8%で、最も少ない。

調査した3日間のうち、Cマンション居住者は、わずかに、2.8%であった。7月末で、帰省している層も多かったためであろうが。その他、「外部からの利用者が混み合う為、利用しにくい」、「入居当初は利用していたが、家族が増えたので、家庭用洗濯機を購入し、たまに洗濯所を利用する程度である。」などの居住者の意見にもあったように、Cマンションの居住者自身であっても必ずしも、日常的に利用しているとは限ら

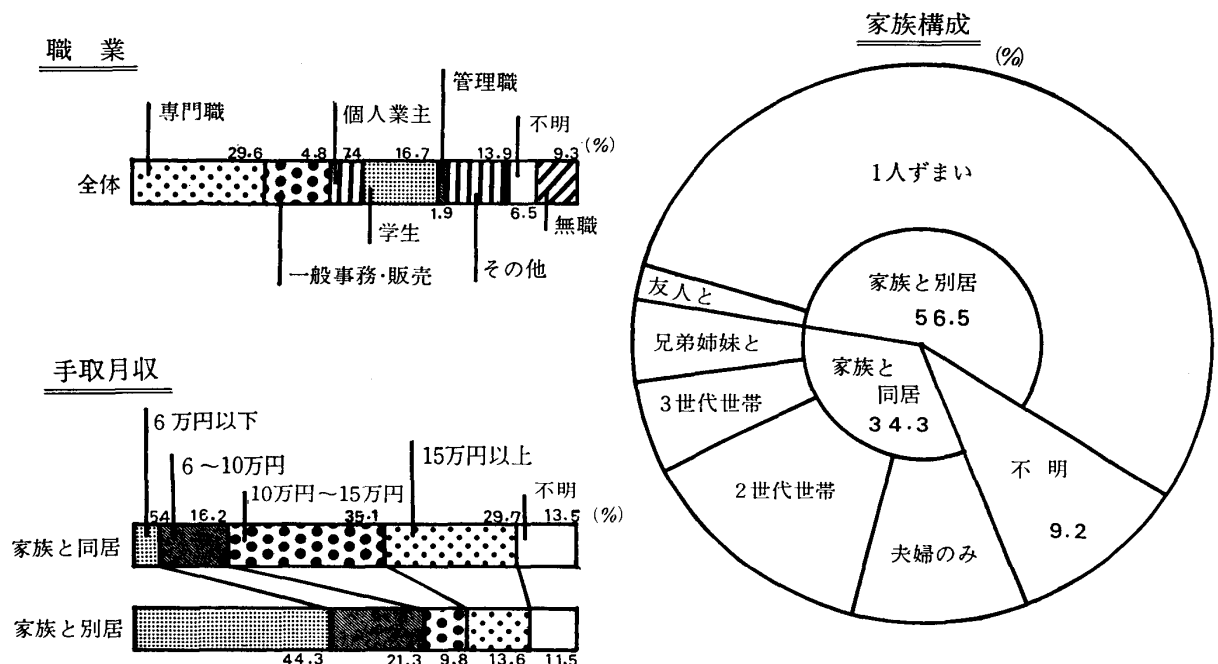


図1 利用者の概要

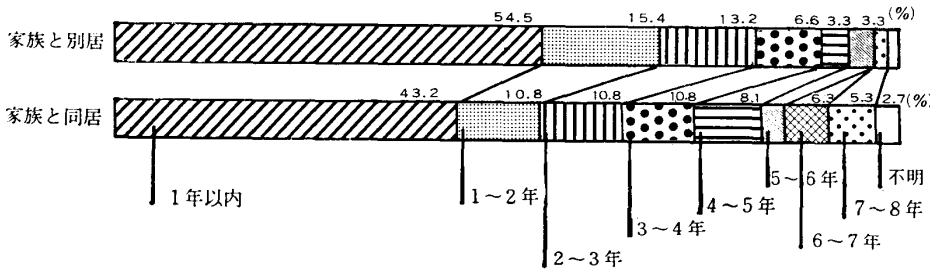


図2 当洗たく所の利用経験年数

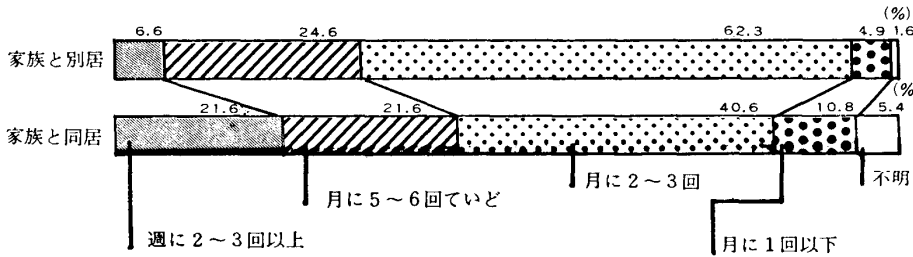


図3 利用頻度

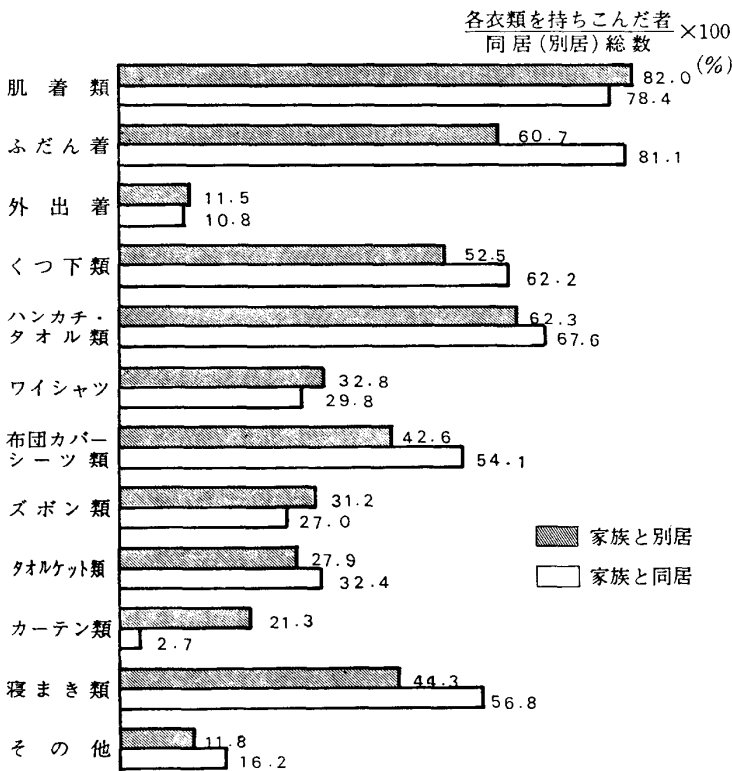


図4 洗たく物の内容

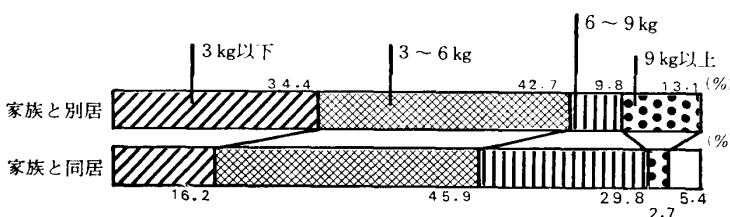


図5 洗たく物1回分の重さ

ないようである。

今回の調査では除いたが、外国人の利用者が、かなりいる。20代~50代の年齢層で、男女共多い。10人程が腰かけて、時間待ちしている中で、約半数は、外国人で占められ、他人同志と思われるのに、互いに言葉をかけている。黙ってすわっている日本人に比べて、対照的であった。

(3) 利用実態

(イ) 利用経験年数

家族と別居している者は、全体的に経験年数が浅い。当洗濯所開設当初からの利用者が、4%弱いるが、半数以上は、1年未満であり、平均して、2年

4ヶ月である。(図2)

(ロ) 利用頻度

週に2~3回という常連者は、約14%であり、半数は、月に2~3回である。(図3)

(ハ) 洗濯物の内容と重さ

全体的に、肌着、ふだん着、くつ下類、ハンカチ、タオル類など、日常の衣類が多い。家族と同居している場合、布団類、寝巻類が、比較的多い。(図4)

その重さは、半数近くが、3~6kgであり、家族と同居している場合では、6kg以上が、1/3も占めている。(図5)

(ニ) コインシステムのよい点

全体的に、「仕上がりが早い」を2/3以上があげている。次に、家族同居の場合で、「経済的」が、家族別居の場合で、「気分的に楽」が続いている。家族同居の場合、「衛生的、清潔」が、30%近く占めている点、注目出来る。その他として、「家庭用洗濯機に入らないような大きな物の洗濯に便利」、「クリーニング屋に出しにくい物(ex, 布の靴など)まで洗える」、「家に物干場がないので助かる」、「雨の日に好都合」などがあがっている。(図6)

(ホ) コインシステムの不都合な点

家族の同居と別居とでは、傾向が少し違う。前者では、「当洗濯所まで遠い」が最も多く、次に「汚れが残ることがある」、「洗濯物の運搬がこたえる」が続いている。しかし、後者は、

「洗濯物の運搬がこたえる」、「待たされることが多い」、「汚れが残ることがある」の順序になっている。「待たされる」ことについては、まず、機械を確保するまでの時間であり、洗濯している間ではない。当洗濯所は、当初に比べて、面積も広くなり、設備も増えて、待たされる不満は、大分少なくなったという。しかし、経験年数の浅い別居層は以前の状態と比較して答えている訳ではないので、「待たされる…」の占める割合も高くなったのであろう。その他の意見として、「繊維によっては、しわになる、傷むことがある」など「乾かす」ことに伴う苦情が出ている。(図7)

(ハ) コインシステムによって、「洗う」、「乾かす」の便・不便について、(図8, 図9)

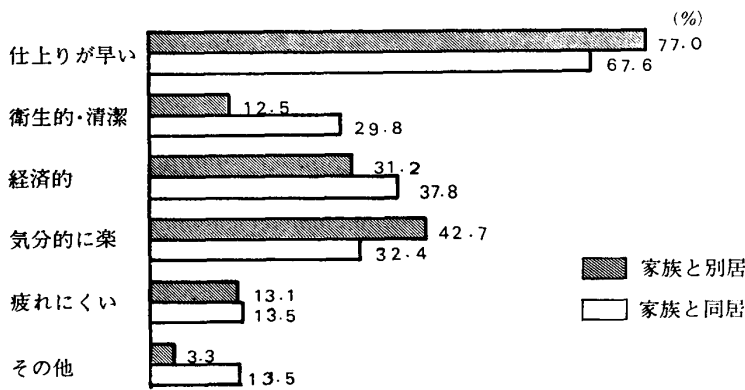


図6 コイン・システムのよい点

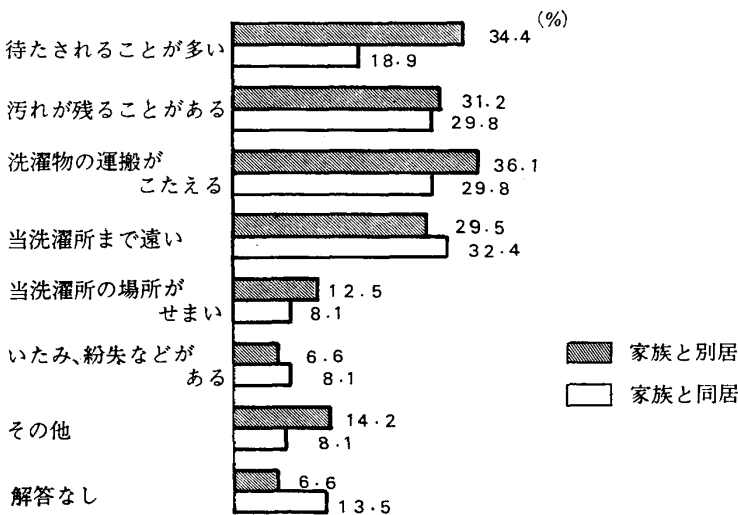


図7 コイン・システムの不都合な点

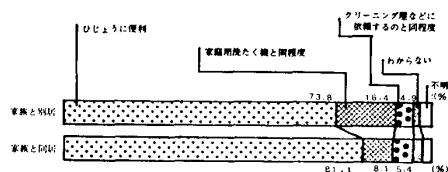


図8 洗たく方法について

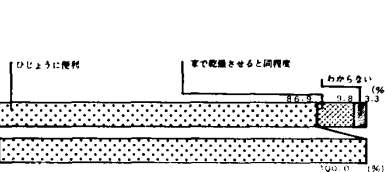


図9 乾燥方法について

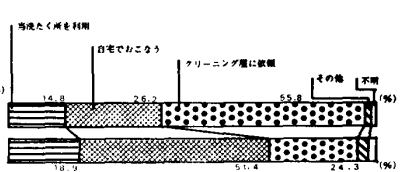


図10 プレスが必要な場合

全体的にみて、『ひじょうに便利』と答えた人は、「洗う」場合で、約77%、「乾かす」場合で、約92%であり、「乾かす」便利さを認めている者が多い。また、家族と同居している者の方が、『ひじょうに便利』と答える者の割合が高い。

(ト) プレスコーナーの利用状況

全体として、利用率は、15.7%で、家族と別居の場合、さらに少ない。家族と同居している場合、プレスが必要な時は、約56%が、『クリーニング屋に依頼』と答えている。一方、家族と同居している場合、アイロンを『自宅でおこなう』が、約51%を占めている。(図10)

(チ) 赤羽台団地の場合

(イ) セルフサービスのコインシステムによる洗濯の共同化が採用された経過

当時、すでに欧米では、各所にこのシステムがあり、設備メーカーは、日本でも市場を拡大しようとしていた。採用するにあたって、①経済的に安定している層、②新しい住宅地の居住者、③新しい生活様式に積極的な層、が利用者層の最低条件として必要であることから、一定収入以上があり、インテリ層が比較的多く、洗濯業者もまだ定着していなかった当団地が選ばれた。

(ロ) セルフサービスから、業者仲介によるコインシステムに変わった理由

① 「待たされる」ことから、客足が遠のく。居住者の生活条件が、ほぼ似通っているため、利用時期、利用時間が互いに重なり、利用するために行列を作る程であった。その上、洗濯が仕上がっているのにその衣類を取り出しに来ない利用者などもいて、混み合っているのに、設備はフル回転できない、という、非能率的な状況すら生じた。

② 同種類の店が進出してくる。

セルフサービスではなく、専人の業者がすべてやってくれるので、利用者は、洗濯物の運搬をするだけでよい。少々高がついても、わずらわしさがないため、利用者が、吸収されていった。

③ 家庭用洗濯機の普及

脱水能力も高まり、家庭での洗濯もより便利となった。

④ 設備メーカーの採算上

輸入品なので、設備そのものが高価につく。その上、利用状況が、アンバランスで、設備が遊ぶことがあり、不経済である。欧米では、安価で設置できる上、肌着などを出すのも抵抗が少ないから、設備の効率もよく、営利上、不安定ではない。

以上①～④があげられる。結局、巧妙な宣伝によって、興味半分もあって、利用者が増加したが、「肌着は出しにくい」などの日本人特有の潔癖性、共同利用に対する公德心の欠如、など、利用者自身に起因することに加えて、同業者の進出、家庭用洗濯機メーカーによる攻勢など、周囲の情勢が加わり、利用者層が定着しなかったといえる。

IV 考 察

以上、セルフサービスのコインシステムによる洗濯の共同化を、現在、行なっている所、すでに廃止されたところの両者の結果から、次のように考察出来る。

1) 設備の効率的な運転

Cマンションの居住者の中には、『この洗濯所があったから』とか、『うちの中に、洗濯機も干し場もないのはすばらしい』という理由で、住む決心をした者もいるといわれる⁷⁾。それにもかかわらず、居住者専用でないために、利用しにくい面が出てきている。しかし、管理する側からみると、限られた利用者層では、設備の効率的な運転が不可能で、維持に伴う経費や減価償却費すら困難になりかねない。本来の利用者の便を優先させた上で共同化を実施していくためには、管理そのものについて、再検討する必要がある。

2) 立地条件

外部の利用者も含めた利用状況は、かなりよい。これは、国電の駅から近いため、途中下車したり、他の用事のついでに立ち寄りたり、という融通がつきやすいこと、および駐車場もあって、大量の洗濯物を運搬する車所有者にとっては、とくに便利であることなども、原因していると思われる。このような立地状況は、利用を高め、かつ継続させていく上での条件の一つとなり得る。

3) 洗濯感

利用者の大半は、若い年齢層である。これは、洗濯機置場も物干場もない住宅事情もさることながら、共同利用に対する精神的こだわりが少ない年齢層であるためであろうか。若夫婦2人で、汚れ物の大袋をさげ

てきて、2人で手際よく設備のセットをし、待ち時間は、隣のスーパーマーケットで買物をし、洗濯が仕上がれば、2人で、それぞれ荷物を分担して持って帰る——というよくある光景からも、洗濯を、従来の負担の重い家事労働としてではなく、ショッピングを楽しむのと同様のとらえ方すら感じられる。「肌着は主にどこで洗濯するか」の間に対し、全体的に70%以上が、「当洗濯所で」とこたえており、若い層にその傾向が強い。

4) 共働き家庭にとっての利便性

洗濯労働にともなう時間的拘束性は、共働き家庭にとっては問題である。しかし、「仕上がりが早い」という長所をもつ、セルフサービスのコインシステムは、そのやり方いかんで、共働き層にも受け入れられやすいのではないだろうか。今回の調査では、主婦利用者のうち、約73% (16/22) が、有職者であった。

5) 今後の希望

「当システムが、増えていくことについて、どう思うか」に、家族と同居の場合で、100%、別居で、96.7%が「のぞましい」とこたえている。

現状では、利用上の問題は多々にあるが、当システムを定着させていくことを前提にした上で、その解決をはかることが、重要だといえよう。

V 結 語

洗濯の共同化を実施している所、廃止した所、それぞれの事例研究より、次のことを得た。

- (1) 洗濯の共同化が継続する上で、立地条件は重要である。その際、利用者が、「待たされる」ことがないように、管理が、十分行われなければならない。
- (2) 当システムの利用者層の大半は、洗濯をレジャーの延長としてとらえ、肌着などを出すことにも大きな抵抗を感じない若い層であった。
- (3) 長所として、「仕上がりが早い」、「経済的」、「気分的に楽」が、主にあげられる。これらは、共働き家庭に好都合であり、今後、集合住宅地などの施設計画において、当システムが、考慮されるべきと思われる。

本稿は、第23回日本家政学会総会(1971)において、口頭発表を行なったものをまとめたものである。

(1976年7月31日受理)

文 献

- 1) 鈴木雅子(1964): 高層鉄筋住宅の洗濯の実態について——家政学研究11, 1・2, p.98
- 2) 金谷利子(1965): 洗たく作業について——家政学研究12, 2, p.131

- 3) 町田玲子・他(1975); 共働き家庭の生活環境Ⅱ
家事労働について——日本家政学会関西支部第43
回研究発表会
- 4) 富士田亮子・他(1971); 洗濯作業と住空間の関
係について, Ⅱ洗濯作業と間取りの関係について
——家政学研究18, 1, p.67
- 5) 町田玲子・他(1968); 家庭労働の共同化, 2 農村に
おける洗濯の共同化——家政学研究15, 2, p.150
- 6) 町田玲子(1975); 市街地高層住宅の洗濯物干場の
問題——京都府立大学学術報告(理学・生活科学
・福祉学) 21・B・p.55
- 7) 犬養智子; 「暮しの設計」1972. 9, p. 94